

## 『説文解字』「許絺」段注についての一考察

——「文者錯畫也」をめぐって(上)——

田村(大田) 加代子

## 一、はじめに

『説文解字』(以下『説文』と略称する)の許慎の自叙(以下「許絺」と略称する)の冒頭近くに、「倉頡之初作書、蓋依類象形。故謂之文。」(倉頡さうけつの初めて書を作る、蓋し類に依り形かたどに象る。故にこれを《文》と謂ふ。)とあり、「文」に対して段玉裁が「文者遣畫也」と注している。これは、『説文』本篇で「文」字に許慎自身が施した説解を引用して「許絺」の「文」字に注したものである。ただし、『説文』本篇「文」字の許慎の説解(以下「説解」と略称する)では「錯畫也」と作っているので、その段玉裁の注(以下「段注」と略称する)では「錯」字を改め「遣」とすべきである、と校勘をしている。それを踏まえて「許絺」の段注は「文者遣畫也」となっているのである。

このように、段玉裁は『説文』中の説解及び「許絺」に注を施すにあたり、しばしば他所の説解を引用したり参照したりしつつ、それらの整合性を企図しながら、自論を裏付けたり展開した

『説文解字』「許絺」段注についての一考察(田村(大田))

りしている。と同時に、文字の異同についての校勘も行っている。

本稿では、「文者遣畫也」という段注を手がかりとして、注と説解との関係、すなわち、段玉裁が『説文解字注』を著す際に『説文』本体をどのように活用したのか、その一端について考察を試みる。段玉裁はなぜ「許絺」にこの注をつけたのか。また、本篇の「文」の説解に、なぜ「錯」を「遣」とすべきだと注したのか。この問いに対する答えを探っていく過程で、『説文』と段注で引く諸文献に見える「畫」、「績」、「繪」、「繡」をめぐる議論を通して、段玉裁の関心が那邊にあったのかを明らかにしたい。

本稿で『説文』のテキストとして用いるのは、一九八一年上海古籍出版社刊、經韻樓藏版の影印本である。字体、文字の異同など、特に断りの無い限りはこのテキストに基づく。

又、引用文並びにその書き下し文、本文中の固有名詞は原則として正字を用いる。

## 二、問題の所在

段玉裁は、「許敍」の「倉頡之初作書、蓋依類象形。故謂之文。」（倉頡の初めて書を作る、蓋し類に依り形に象る。故にこれを文と謂ふ。）の箇所「文」に付した注において、『説文』「文」部の「𠄎」字の説解を採り、

文者、造畫也。

文は、造畫なり。

と言っている。

一方、「文」部の「𠄎」字の説解を見ると、

𠄎、錯畫也。象交文。

𠄎は、錯畫なり。交文に象る。

とある。

これに対し、段玉裁は次のように注している。

錯、當作造。造畫者、造之畫也。『考工記』曰、「青與赤謂之文。」造畫之一端也。造畫者、文之本義。彰彰者、彰之本義。義不同也。黃帝之史倉頡見鳥獸遞遠之迹、知分理之可相別異、初造書契、依類象形。故謂之文。

「錯」は、當に「造」に作るべし。「造畫」は、造畫するの畫なり。『考工記』に曰く、「青と赤と、これを文と謂ふ。」と。「造畫」の一端なり。「造畫」は、「文」の本義なり。「彰彰」は、「彰」の本義なり。義、同じからざるなり。黃帝の史、倉頡は、鳥獸の遞遠の迹を見、分理の、異なるを相ひ別つべきを知り、初めて書契を造るに、類に依り形に象る。故にこれを《文》と謂ふ。

段玉裁は、「錯」字は「造」字とすべきだと主張する。しかし、その根拠はここには具体的には示されていない。注の中心は、「文」についての極めて特化した註解にある。

本稿では、「錯」は「造」とすべきだとする段玉裁の主張の根拠を探りつつ、「文」について、なぜ段玉裁が『周禮』『考工記』の「畫績」を引き、「文」と「彰」の本義の違いに言及することに特化した注釈をつけたのかを跡づけしながら、段注が説解とどのような有機的關係を保ちつつ展開されているかを探っていくことにする。

## 三、「錯」と「遣」について

『説文』「金」部を見ると、「錯」字について説解には、

錯、金塗也。从金、咎聲。

錯は、金もて塗おくなり。金に从ひ、咎の聲なり。

とある。部首が「金」であるから、「錯」の本義は金属に関係する。段注に曰く、

塗、俗作塗。亦或作捺。謂以金措其上也。

或借爲措字。措者、置也。

或借爲磨厝字。厝者、厲石也。

或借爲送遣字。東西曰送、邪行曰遣也。

「塗」は、俗に「塗」に作る。亦た或は「捺」に作る。金を以て其の上に措おくを謂ふなり。

或は借りて「措」字と爲す。「措」は、置なり。

或は借りて「磨厝」字と爲す。「厝」は、厲と石なり。

或は借りて「送遣」字と爲す。東し西するは「送」と曰ひ、邪なまに行くは「遣」と曰ふなり。

『説文解字』許敍「段注」についての一考察(田村(大田))

この段注からわかることは、「錯」という字は、仮借によって「措置」の「措」の代わりに用いられ「置く」という意味を表すこともあり、また、「磨厝」の「厝」の代わりに用いられ「砥石」の意味を表すこともあり、また、「送遣」の「遣」の代わりに用いられ「行つたり来たりする」の意味を表すこともある。要するに、部首(義符)は「てへん」であつたり「がんだれ」であつたり「しんによう」であつたりするが、いずれも発音を表す「昔」を旁(音符)とする形声文字であるために、発音を同じくする(すなわち音符を同じくする)「かねへん」の「錯」が仮借文字として代用されることがあるということである。これらはいずれも仮借の用字法であつて、「錯」字の本義ではない。とすれば、「錯畫」の「錯」字も仮借である可能性が出てくる。

次に、段玉裁が「錯、當作遣。」(「錯」は、當に「遣」に作るべし。)と注した根拠を探るために、「錯」が「遣」の仮借字であると注した部分について、さらに詳しく見てみよう。

「毛」を部首とする「送遣」についての説明、「東西曰送、邪行曰遣」は、段玉裁自身の言葉ではなく、「錯」字の段注にもあるように、「毛詩」の「毛傳」の引用である。

いま、「錯」字の説解について見てみると、「疋」部に、

錯、送遣也。从疋、昔聲。

造は、送造なり。送に从ひ、昔の聲なり。

とある。その段注に、

送、各本作迹。依『廣韻』、『玉篇』、正。

『小雅』、『獻齏交錯』。毛曰、「東西爲交、邪行爲錯。」

『儀禮』、『交錯以辯』。旅酬行禮、一送一造也。

「送」は、各本「迹」に作る。『廣韻』、『玉篇』に依り、正す。

『小雅』に、「獻齏交錯す」とあり。毛曰く、「東し西するは交と爲し、邪めに行くは錯と爲す。」と。

『儀禮』に、「交錯し以て辯くす」とあり。旅で酬め禮を行ひ、一送一造するなり。

とある。いま、中華民国七十五年十二月校正六版、藝文印書館印行、澤存堂藏板張氏重刊『校正宋本廣韻』（影印）、「入聲十九鐸韻」を見ると、

造、『説文』云「送造也」。

造は、『説文』に「送造なり。」と云ふ。

とあり、「迹」ではなく「送」に作っている。

また、一九八七年七月第一版、二〇〇四年一月第二次印刷、中華書局出版、澤存堂藏板張氏重刊『大廣益會玉篇』（影印）を見ると、卷第十「送」部に、

造、且各切。亂也。送造也。今作錯。

造は、且各の切。亂なり。送造なり。今「錯」に作る。

とあり、やはり「迹」ではなく「送」に作っている。と同時に、「今」（南朝梁から遅くとも宋代までのある時点）、「造」は「錯」字に作っていることにも言及している。梁以降のある時点で「造」字が「錯」字に取って代わられたことがわかる。

ちなみに、『廣韻』「鐸韻」では、「造」と同じ小韻の字に「錯」と「厝」がある。小韻が同じということは同音異字であるから、「錯」が「厝」や「造」の仮借字として用いられても不思議ではない。『廣韻』には、「錯、鑿別名。又雜也。摩也。『詩傳』云、『東西爲交、邪行爲錯』。『説文』曰、「金塗也」。（錯は、鑿の別名。又た雜なり。摩なり。『詩傳』に云ふ、「東し西するは交と爲し、邪めに行くは錯と爲す。」と。『説文』に曰く、「金もて塗くなり。」と。）とあり、「送」ではなく「交」、「造」ではなく「錯」に作っている。

段玉裁が「錯」字の注で引用している『小雅』の「獻醜交錯」は、『毛詩』「小雅」「楚茨」(六章、章十二句)の第三章第七句である。「小序」によれば、「楚茨」は幽王を刺つた詩で、政が煩瑣で賦役が重いために、田畑は多く荒れ果て饑饉が起こり、民は命を落とし、命ある者も離散して、先祖を祭ることもなくなつた。そのため先祖の加護を得られず、さらに田畑が荒れ饑饉が続く悪循環に陥つたことを憂いて、当時の心ある人が古の明徳の王を思慕して作つた詩であるという。その第三章は、

執爨踏踏、爲俎孔碩、或燔或炙。

君婦莫莫、爲豆孔庶、爲賓爲客。

獻醜交錯、禮儀卒度、笑語卒獲。

神保是格、報以介福、萬壽攸酢。

爨を執ること踏踏たり、俎を爲ること孔だ碩なり。或ひは燔き或ひは炙る。

君婦は莫莫たり、豆を爲ること孔だ庶し。賓の爲にし客の爲にす。

獻醜、交錯して、禮儀は卒く度あり、笑語は卒く獲たり。

神、保んじ、是れ格り、報めて以て福を介く。萬壽は、酢る攸なり。(※朱子の『詩集傳』では句読が異なる。以下、論者の断り書きには※を付す。)

『説文解字』許敍段注についての一考察(田村(大田))

という内容である。『重刊宋本毛詩注疏附校勘記』(所謂「十三經注疏本毛詩」)のテキストでは詩の本文は「交錯」に作つてゐる。第七句の「獻醜交錯」について、「毛傳」では、

東西爲交、邪行爲錯。

東し西するは「交」と爲し、邪めに行くは「錯」と爲す。

と言ひ、「交」、「錯」に作つてゐる。「鄭箋」には、

始主人酌賓爲獻。賓既酌主人、主人又自飲。

酌賓曰醜。

至旅而爵交錯以徧。

始め、主人、賓に酌して獻と爲す。賓、既に主人に酌せば、主人、又た自ら飲む。

賓に酌すを「醜」と曰ふ。

旅に至りて、爵、交錯し以て徧くす。

とある。「獻」と「酌」の主語と客語をそれぞれ主人と賓客、賓客と主人と交差させることで、「交錯」(送遣)の義が視覚的にとらえられるようになる。酒席における酒盃の往来の描く軌跡

は、たくさんの交点を持つ複数の線からなる文字を連想させる。

「鄭箋」では、まず、酒礼の順序に触れて、最初に主人が賓客に献杯し、賓客が主人に返杯したら、今度は主人が飲む、と言っている。詩本文の「獻醜」について、「獻」は、主人↓賓客、「醜」は、賓客↓主人、と解釈し、続いて「交錯」について、酒礼の順序に従って酒盃を祭祀の場にいる主人と賓客、幼と長との間で順序正しく遍く交わした、と解釈する。詩本文の「旅」は「序」と訓じているが、「序」は文字にあてはめると書き順、すなわち筆画の交差する順序を連想させる。

「鄭箋」を承けて孔穎達の「毛詩正義」では、「獻醜據其初。」(獻醜は其の初めに據る。)、また、「交錯言其末。」(交錯は其の末を言ふ。)&#x2013;と言っている。「獻醜」と言う言葉は、酒席の始まりの方に視点を置いて述べたもの、一方、「交錯」は酒席の終わりの方について言及したものだ&#x2013;と解釈している。酒席は「獻醜」から始まり、その作法は『禮記』の「特性」や「少牢」に記述があり、その礼儀に則って進められる。そして酒席が終わりに近づくと、「交錯」、すなわち偏りなく順序よく交々酒盃が遍く行き渡る。そのとき、座は酒がまわってもあくまで礼節を欠くことなく、談笑しても時宜を得て節度を保っている。このことは『儀禮』の「郷射記」に記されている。これもまた、文字の書き始めの第一画、それに次ぐ第二画から始まり、一字が成るときには、方形の様々な方面に筆画が遍く行きわたり調和のとれた文字が完

成する様を連想させる。

段玉裁がその注で引いた『儀禮』の「交錯以辯」は、『儀禮』「特性饋食禮」に見える文で、「衆賓及衆兄弟交錯以辯。」(衆賓及び衆兄弟、交錯し以て辯くす。)&#x2013;とあり、鄭玄はその注で、「交錯、猶言東西。」(交錯は、猶ほ東西すと言ふがことし。)&#x2013;と言っている。これは、「毛傳」の訓詁を端折ったものである。ちなみに現代中国語でも「東奔西跑」と言い、「東西」は行き来することを表すのに用いられる。

以上の手続きによって、「行ったり来たりする」という往来の意味を表すのに用いられている文字「交錯」は、「送遣」の仮借字である可能性が高いということが明らかになった。

#### 四、「交」と「送」について

さて、いまここで、『説文』に拠って「送」字の説解を見ておこう。「辵」部に、

送、會也。从辵、交聲。

送は、會なり。辵に従ひ、交の聲なり。

とあり、その段注に、

東西正相値爲逡。今人假交脛之交爲逡會字。

東し西し、正に相ひ値るをば「逡」と爲す。今人、「交脛」の「交」を假りて「逡會」の字と爲す。

とある。「東し西し、正に相ひ値るをば逡と爲す」とは、先に引いた『毛詩』『小雅』『楚茨』の「毛傳」、「東し西するをば交と曰ふ」に基づくものである。「交脛」の「交」を假りるとは、『説文』『交』部に、「𠂔、交脛也。从大。象交形。」（𠂔は、交脛なり。大に从ふ。交の形に象る。）とあり、見出し字の篆書「𠂔」を見ればわかるように、「𠂔」の足の部分が交差している。これは、脛（膝から踵までの部分）を交差した形だと許慎は言う。「交」は、「交差した脛」を本義とするが、二本の線が交わるという意味を表す「逡會」の代わりに「交會」と作るのは仮借字としての用法であるというのが、段玉裁の主張である。『説文解字注』において、段玉裁は「仮借」という用字法を重視し、随所で言及している。この「交」字についても、段玉裁はその注で、

交脛謂之「交」。引申之、爲凡交之稱。

故「交」下曰「交也。」

「𠂔」下曰「交木然也。」

「𠂔」下曰「交灼木也。」

『説文解字』許敎段注についての一考察(田村(大田))

「楛」下曰「木參交以枝炊籩者也。」

「衿」下曰「交衽也。」

凡兩者相合曰「交」。皆此義引申段借耳。

『楚茨』『傳』、「東西曰交、邪行曰逡。」「逡」字之段借也。

『小雅』『交桑扈』『箋』云、「交交、猶佼佼。飛往來兒。」

而『黃鳥』、『小苑』『傳』皆曰、「交交、小兒。」則與本義不同。蓋方語有謂小交交者。

交脛、これを「交」と謂ふ。これを引き申し、凡そ「交はる」の稱と爲す。(※所謂「引申義」、派生義のこと。)

故に「交」の下に曰く、「交なり。」と。

(※『説文』『交』部「𠂔」字の説解。)

「𠂔」の下に曰く、「交木、然るなり。」と。

(※『説文』『火』部「𠂔」字の説解。)

「𠂔」の下に曰く、「交灼木なり。」と。

(※『説文』『火』部「𠂔」字の説解。)

「楛」の下に曰く、「木、參交し、以て炊籩を枝へるものなり。」と。

(※『説文』『木』部「楛」字の説解。)

「衿」の下に曰く、「交衽なり。」と。

(※『説文』『衣』部「衿」字の説解。)

(※以上は、「脛」を交差する本義を引き申し、凡そ交差す

る場合は「脛」に限らず皆「交」と称す派生義の例。)凡そ兩者、相ひ合ふを「交」と曰ふ。皆な此の義の引申、段借なるのみ。

『楚茨』の「傳」に、「東し西するは交と曰ひ、邪めに行くは造と曰ふ。」とあるは、「造遣」字の段借なり。

『小雅』の『交交桑扈』の「箋」に云ふ、「交交は、猶ほ佼佼なり、飛び往來する兒なり。」と。<sup>(5)</sup>

しかしして、『黃鳥』、『小苑』の「傳」、皆な曰ふ、「交交は、小さき兒なり。」と。則ち本義と同じからず。蓋し、方語いなかことばに小さきを交交と謂ふもの有るなり。<sup>(6)</sup>

ここまでの議論を整理しまとめると、段玉裁が「錯畫」を「造畫」とすべきだと主張した根拠は、「交」は「造」の、「錯」は「造」の仮借字と考えたため、ということになる。「交」と「錯」が「造」と「造」の仮借字である証左として、段玉裁はまずもって『説文』の説解を出発点とした。『説文』では、「交」の本義は「交脛」(交差した脛の形)、「錯」の本義は「金もて塗く」(金で塗装すること)であり、この二字を合わせて「交錯」と連語にしても、「行ったり来たりする」の意にはならない。そこから、『毛詩』の「交錯」の用例、『儀禮』の「交錯」の用例を引き、『毛詩』「獻疇交錯」の「毛傳」、「交交桑扈」の「毛傳」、「交錯以辯」などを手がかりに、「交錯」は、「疋」を部首とした「造

遣」字に作るべきだと主張した。

更に付け加えれば、段玉裁は「文」字の説解に対する注で、「錯畫」を「造遣之畫」と四字に引き延ばし、仮借字ではなく「疋」のある「造」字、「遣」字を用いて「造遣する畫」とすることで、動的な意味要素を明示した。「疋」について、許慎は、「疋、乍行乍止也。从彳止。」(彳は、乍しほく行まるなり。「彳」と止とにとらふ。」「彳」については、「彳、小歩也。象人脛三屬相連也。」「彳は、小歩なり。人の脛、三屬、相ひ連なるに象るなり。)(※段注は「三屬」を、「三屬者、上爲股、中爲脛、下爲足也。單舉脛者、舉中、以該上下也。脛動而股與足隨之。」「三屬は、上は股と爲し、中は脛と爲し、下は足と爲すなり。單だ脛のみを舉ぐるものは、中を舉げ以て上下を該かぬるなり。脛、動けば、股と足とこれに隨ふ。)と説明している。」「止」については、「止、下基。象艸木出有趾。故以止爲足。」「止は、下基なり。艸木出で趾もとい有るに象る。故に「止」を以て「足」と爲す。)と解しているので、「疋」はその形の成り立ちから、本来「歩く」と「止まる」とを組み合わせた「歩いたり止まったり」という歩行に関わりのある意味を有していることになる。段玉裁が「交錯」ではなく「造遣」字を用いているのは、仮借字ではなく本字、本義を用いようという意識の表れであろう。部首の「疋」を取り去れば「交」と「昔」とが残り、「交」も「昔」も音符(声符)として機能することから、段玉裁は仮借という用字法の



原理を念頭に置いて註解したとも考えられる。例えば「交」を声符とする字は「佼、皎、校、狡、効、劼、皎、郊、狡、鮫」など、「昔」を声符とする字は「錯、借、惜、措、厝、譜、藉、醋、鵠、踏」など、枚挙に遑がない。段玉裁は、仮借という用法の中に、文字の持つ生産性、柔軟性といった原初的な本質を見ていたのではないだろうか。

以上、「許敍」の冒頭部分、「黃帝之史倉頡、見鳥獸遞迓之迹、知分理之可相別異、初造書契、依類象形。故謂之文。」の「文」字に対して段玉裁が「文者遣畫也」と注した背景を探ってみた。仮借という用法に注意を払い、仮借字と本字とを峻別し、つねに本字に戻り、本義に帰着させ、字義を再確認しようとする姿勢は、『説文』「文」部の「𠄎」字の説解「𠄎、錯畫也。」に対して、「錯、當作遣。遣畫者、交遣之畫也。」と注したこと、他の関連箇所でも「交遣」という文字を使っていることに、その一端が表れている。

次節では、「文」字の説解に対して「遣畫者、文之本義。」（遣畫は、文の本義なり。）と注した段玉裁が「文」についてどのよう<sup>1</sup>に考えをめぐらせたかについて考察する。

## 五、「文」について（一）

さて、段注の「文者錯畫也」の「文」について話を進めるた

『説文解字』「許敍」段注についての一考察(田村(大田))

め、本稿の第二節で引用した段注を改めて確認しておく。

錯、當作遣。遣畫者、交遣之畫也。

『考工記』曰、「青與赤謂之文。」遣畫之一端也。

遣畫者、文之本義。

文彰者、文之本義。

義不同也。

黃帝之史倉頡見鳥獸遞迓之迹、知分理之可相別異、初造書契、依類象形。故謂之文。

「錯」は、當に「遣」に作るべし。「遣畫」は、「交遣」するの「畫」なり。

『考工記』に曰く、「青と赤と、これを「文」と謂ふ。」と。

「遣畫」の一端なり。

「遣畫」は、「文」の本義なり。

「文彰」は、「彰」の本義なり。

義、同じからざるなり。

黃帝の史、倉頡は、鳥獸の遞迓の迹を見、分理の、異なるを相ひ別つべきを知り、初めて書契を造るに、類に依り形に象る。故にこれを《文》と謂ふ。

次に日本語訳を付す。

「錯」字は、本来は「造」字に作るべきである。「造畫」とは、「造遣」する「畫」のことである。

『周禮』「考工記」「畫績」に、「青と赤とを「文」と謂う」とある。これはいろいろある「造畫」の一例である。

「造畫」が「文」の本義である。

「彰彰」が「彰」の本義である。

したがって、「文」と「彰」とは、本義は同じではない。

黄帝の史官であった倉頡は、鳥獸の足跡がその種類によつて異なるのを見て、文字の原理とは、異なるものを区別することとができるもののだと気づき、初めて書契を創造するにいたり、類別を拠り所とし、事物の形を抽象化するという方法に依つた。だから、これを《文》というのである。

この段注では、「文」の本義は「會さつて遣つた、境界を畫した線」(※説解の「逡、會也」、「遣、造遣也」、「畫、介也」に基づいて訳出した)であり、「皀の乾かさ」を本義とするのは「彰」という文字であつて、「文」と「彰」の二者には本義の上で区別があり、混同混用すべきでないことを明らかにすることに意を用いている。この点については、本稿の統編で詳論する。段注の後半「黄帝之史倉頡」以下「故謂之文」までは、「許敍」の文。詳しくは、拙稿『説文解字』「許敍段注」訳注の試み(二)「『饗養』第二十二号所収」を参照されたい。

段玉裁が引用した『周禮』「考工記」「畫績」を見る前に、いままでも問のままにしてきた「畫」について確認しておく。「畫」には読音がふたつあり、ひとつは「胡卦切」、『釋名』に「畫、繪也。以五色繪物象也。」(畫は繪なり。五色を以て物象を繪けばなり。)(※畢沅の校勘あり。今略す。)、いまひとつは「胡麥切」、『廣韻』に「分也。」(分けるなり。)&ある。『説文』の説解と段注は次の通り。

畫、介也。從聿。象田四介。聿所曰畫之。

畫は、介なり。聿に従ふ。田の四介に象る。聿はこれを畫する所曰なり。

段注では、「介也」の「介」字について、

介、各本作𠄎。此不識字義者所改。今正。

八部曰、「介、畫也。從八從人。人各有介。」

介は、各本「𠄎」に作る。此れ、字義を識らざる者の改むるところなり。今、正す。

「八」部に曰く、「介は、畫なり。八に従ひ人に従ふ。人各々介つ有り。」

と言ひ、「畫」と「介」とが互訓であることを示唆している。「介」字の注では、「介」と「畫」とが互訓であるとはつきり言っている。『説文』「八」部の説解に「八は別なり」とあり、その字形を「分別し相ひ背くの形に象る」と説解している。「介」の秦篆は「𠄎」であることから、許慎はこれを会意文字とし、「人」と「八」からなると解した。段玉裁はその意味するところを「人は各々其の分かつところを守る」と注している。かくして、「畫」とは「介」であり、田畑の四方に境界線を画すこと、また、その境界線、「介」に即して言えば、己と他者との間に一線を画すこと、また、人と人との間の境界線、が本義であることが確認できた。

さて、段玉裁が基づいた『周禮』「考工記」の「畫績」には、  
畫績之事、雜五色。東方謂之青、南方謂之赤、西方謂之白、  
北方謂之黑、天謂之玄、地謂之黃。青與白相次也。赤與黑相  
次也。玄與黃相次也。

青、與赤謂之文。赤與白謂之章。白與黑謂之黼。黑與青謂之  
黻。五采備謂之繡。

畫績の事、五色を雜あはすなり。東方、これを青と謂ひ、南方、  
これを赤と謂ひ、西方、これを白と謂ひ、北方、これを黒と  
謂ひ、天、これを玄と謂ひ、地、これを黄と謂ふ。青と白

『説文解字』「許敍」段注についての一考察(田村(大田))

と、相ひ次ぐなり。赤と黒と、相ひ次ぐなり。玄と黄と、相  
ひ次ぐなり。

青と赤と、これを文と謂ふ。赤と白と、これを章と謂ふ。白  
と黒と、これを黼と謂ふ。黒と青と、これを黻と謂ふ。五采  
備はる、これを繡と謂ふ。

とある。

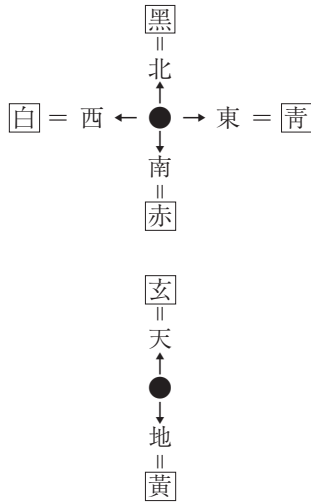
ここで「畫績」の鄭玄の注を見てみると、経文「畫績之事」か  
ら「玄與黄相次也」までについて、「此言畫績六色所象及布采之  
第次を言ふ。績なでいて衣うはをつくを爲つく。」と注している。玄と黒と  
を別色として、六色ながそれぞれ象徴しているものが東西南北の四  
方と天地の上下、合わせて六方であること、そして、彰飾を施す  
順序が、青と白(青が東方、白が西方なので、水平方向に交差す  
る)、赤と黒(赤が南方、黒が北方なので、同じく水平方向に交  
差し、青・白とは十字に交差する)、最後に玄と黄(玄が天、黄  
が地なので、垂直方向に交差する)の順になることを述べてい  
る、そのようにして上衣を作る、というのが鄭玄の説である。

段玉裁が注で引用した「青與赤謂之文」に続く「五采備謂之  
繡」までについて、鄭玄の注では、「此言刺繡采所用。繡以爲  
裳。」(此れ、刺繡の采の用あるところを言ふ。繡ぬいとりして以て裳もすてを  
爲る。)と言っている。経文では、「青と赤」、「赤と白」、「白と

黒、「黒と青」、「五采備わる」の順で述べており、「青」(東方) ↓「赤」(南方) ↓「白」(西方) ↓「黒」(北方) (+黄? (中央?)) ↓「五采」というように、東方から始まり時計回りになっている。明示されていないが、東西南北の中央に黄を配せば五色が完備することになる。先の部分では、二色の組合せがそれぞれ二方向から交わることが述べられていたが、ここでは、隣り合った方向を象徴するふたつの色が交わった場合の呼称を述べている。図式化すると、次の図のようになる。

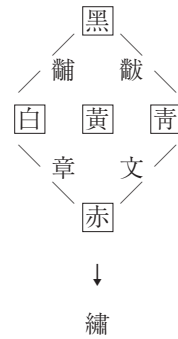
〈水平方向〉

〈垂直方向〉



●を交点として、東西南北と天地が水平軸と垂直軸で交わる。

〈時計回り〉



ここで、「文」、「章」、「黼」、「黻」、「繡」について、『説文』の  
 説解を確認しておく。

𠄎、錯畫也。象交文。(「文」部) (𠄎は、錯畫なり。交文に象る。)

章、樂竟爲一章。从音十。十、數之終也。(「音」部) (章は、樂、竟くるをば一章と爲す。音と十に従ふ。十は、數の終りなり。)

黼、白與黒相次文。从黼、甫聲。(「黼」部)

黻、黒與青相次文。从黻、友聲。(「黻」部)

繡、五采備也。从糸、肅聲。(「糸」部)

「黼」、「黻」、「繡」の三字についての説解は、すべて前述した『周禮』「考工記」の文である。したがって、この三字の解釈は、「考工記」の鄭注、並びに『説文』の段注を参照する。

いま、「繡」字についての『説文』段注を見てみると、その焦点は、絵画（刺繡を含む）と文字の事を、二つ事とみなすか、一つ事とみなすかについての議論となっている。曰く、

『考工記』「畫績之事、襍五采。」

五采備、謂之繡。

鄭氏『古文尙書』曰、「予欲觀古人之象。日、月、星辰、山、龍、華蟲、作績。」<sup>(8)</sup>宗彝、藻、火、粉米、黼、黻、希繡。」此古天子冕服十二章。

「希」讀爲「滯」。或作「絺」、字之誤也。

按、今人以鍼縷所紵者謂之「繡」、與「畫」爲二事。

如『考工記』則「繡」亦「糸之畫繪」同爲設色之工也。

「畫繪」與「文字」又爲一事。

故許以觀古人之象說遵修舊文也。

『考工記』に、「畫績の事、五采を襍す。」とあり。

五采備はる、これを「繡」と謂ふ。（※『説文』の文。）

鄭氏『古文尙書』に曰く、「予、古人の象を觀さんと欲す。

日、月、星辰、山、龍、華蟲もて績を作れ。宗彝、藻、火、

粉米、黼、黻もて繡を希へ。」と。此れ古の天子の冕服の十章なり。

「希」は讀みて「滯」と爲す。或は「絺」に作るは字の誤りなり。

按ずるに、今人、鍼と縷を以て紵ふところのもの、これを

「繡」と謂ひ、「畫」とは二事と爲す。（Ⅰ）

『考工記』の如きは、則ち「繡」も亦た「糸の畫繪」なれば、同じく色を設くの工と爲すなり。

「畫繪」と「文字」とをも、又た一事と爲す。（Ⅱ）

故に許は、「古人の象を觀す」を以て、舊文を遵修するを説くなり。

段玉裁がこの注で最終的に主張したいことは、古には、「刺繡」も「亦た」「畫繪」とひとつの範疇のものだと考えられていただけでなく、その上、許慎を含め古代の人は、さらに「又た」、「（刺繡を含む）畫繪」と「文字」をもひとつの範疇でとらえていた、ということである。

だからこそ「故に」なのである。この「故」の一字に、段玉裁がなぜ絵画と文字とを一事とすることを正当化したかったかが表れている。「故に」に続く許慎の言葉は、『説文』「許敍」の末尾近くにある。許慎は、かの有名な「文字は經藝の本、王政の始めにして、前人の後に垂れる所以、後人の古を識る所以なり。」

『説文解字』「許敍」段注についての一考察(田村(大田))

と言つて文字の意義を高らかに宣言する、その直前に、「古人の象を觀す」という『尙書』の言葉を引用して、必ず古の文字に遵い脩めて、決して自己判断で妄りに穿鑿してはいけないという教えを説いている。原文は次の通り。

【書】曰、「予欲觀古人之象。」言必遵脩舊文而不穿鑿。孔子

曰、「吾猶及史之闕文、今亡矣夫。」蓋非其不知而不問。人用己私、是非無正、巧說邪辭、使天下學者疑。蓋文字者、經藝之本、王政之始、前人所以垂後、後人所以識古。

【書】に曰く、「予、古人の象を觀さんと欲す。」と。言ふこ

ころは、必ず舊文を遵脩して穿鑿せず。孔子曰く、「吾れ猶ほ史の闕文に及ぶ。今は亡きなり。」と。蓋し其の知らずして問はざるを非とす。人、己の私を用ゐ、是非に正しきもの無く、巧說邪辭、天下の學ぶ者をして疑はしむ。蓋し文字は、經藝の本、王政の始にして、前人、後に垂る所以、後人古を識る所以なり。

『尙書』の「予、古人の象を觀さんと欲す。」の記事にある古人の象を天下に示す方法は、天子の衣裳に十二の章を畫き縫いとりすることであった。『論語』の「闕文」の一節は、馬を乗りこなせない場合、調教の上手い人に託すという卑近な例を以て、文字に

相対するときの謙虚な姿勢を喩えている。許慎はその敍文で、『論語』「衛靈公」篇の孔子の「闕文」に触れた言葉と、『尙書』の「畫績」と「繡」に言及した言葉を借りて、文字研究、古典研究に必要欠くべからざる学問的態度としての「闕文」と「遵脩舊文」とを説いた。『論語』の言葉が示す教えは、わからなければ勝手に自己判断をせず保留し、知っている人を探し、質問し、教えを請う謙虚さを忘れてはいけないという戒めである。『尙書』の言葉が示す教えは、旧文、すなわち古の文字を謹んで遵守し学修することが重要で、憶測で妄りに変更を加えたりしてはいけないという戒めである。だとすれば、許慎は「畫繪」のことを以て「文字」のことを説いたわけだから、「畫繪」と「文字」とが同じ範疇だという前提がなければ、この説は成り立たない。許慎が文字のことを言うのに絵画と刺繡にしか言及していない『尙書』の言葉を引いた違和感を合理化し整合的に説明するのが段玉裁の企図だったのではないだろうか。

迂遠なようではあるが、この主張を論証するために、段玉裁は、鄭玄の説に従つて『尙書』の「績」と「繡」を次のように読解する。天子の礼服の十二章のうち、六つの図案は上衣に「績」を「作」し、六つの図案は下裳に「繡」を「附」し、どちらも天子の礼服に五采を以て五色を彰かに施す手工であることを示す。この部分の解釈には諸説あるが(『高本漢書經注釋』(陳舜政譯、中華叢書編審委員會印行、中華民國五十九年)に詳しい)鄭

注に依拠すると、「日、月、星辰、山、龍、華蟲」の六章を衣に績ぬいき、「宗彝、藻、火、粉米、黼、黻」の六章を裳ぬいに績ぬいすること  
を言い、以上が天子の冕服に施す十二章であるとする。  
次に、段玉裁は、「畫」と「繡」との関係のとらえ方が、今人  
と古人とは異なることを説く。

I 今人…「畫」は絵画を「畫えが」くこと、「繡」は針と糸とで  
縫い取りをする刺繡のこと、と別々に分けて考えている。

II 古人…「繡」もまた糸によって絵を「畫えが」くこと（畫繪）  
であるから、絵画も刺繡も同じく色を設おく手工であること  
なし、「畫繪」と「繡」とを同じ範疇のものと考えている。

さらに加えて「畫繪」と「文字」とをも同一範疇の一事と主張し  
ようとする段玉裁が与するのは、勿論、古代の「畫繪」と「繡」  
とを一事とみなす考え方である。その証拠に、『説文』「糸」部、  
「繪」字についての説解に対し、次のように注している。まず説  
解を挙げ、その後で段注を示す。

繪、會。五采繡也。【段注①】

『虞書』曰、「山、龍、華蟲、作繪。」【段注②】

『論語』曰、「繪事後紫。」【段注③】 【段注④】

从糸、會聲。

『説文解字』許敘「段注についての一考察（田村（大田））」

繪は、會なり。五采もて繡するなり。

『虞書』に曰く、「山、龍、華蟲もて繪を作る。」と。

『論語』に曰く、「繪の事は紫を後にす。」と。

糸に从ひ、會の聲なり。

【段注①】

會繪疊韻。

今人分咎繇謨繪繡爲二事。

古者二事不分。統謂之設色之工而已。

古者績訓畫、繪訓繡。說見績下。

「會」、「繪」は疊韻なり。

今人は「咎繇謨」の「繪」、「繡」を分けて二事と爲す。

古は二事分かつたず。統べてこれを色を設くの工と謂ふのみ。

古は「績」は「畫」と訓じ、「繪」は「繡」と訓ず。説は

「績」の下に見ゆ。

【段注②】 咎繇謨文。

「咎繇謨」の文なり。

【段注③】 八佾篇文。

「八佾篇」の文なり。

【段注④】此皆證繪繡無二事也。

これ皆な「繪」、「繡」に二事無きを證あきらかにするなり。

【段注①】の最後に、古は「績」は「畫」と訓じ「繪」は「繡」と訓じたことについての説明は「績」字の注で詳説している、とあるので、『説文』「糸」部「繡」字の關係する説解と段注を見ておく。

繡、織餘也。一曰畫也。从糸、貴聲。

繡は、織餘なり。一に曰く畫なり。糸に从ひ、貴の聲なり。

【段注】

四字依『韵會』補。今所傳小徐繫傳本、此卷全闕。黃氏作韵會時所見尙完。知小徐本有此四字也。

畫者、介也。今謂之畝畫。

績畫雙聲。

【考工記】曰、「設色之工、畫、績、鐘、篋、帆。」

又曰、「畫績之事、襍五采。」

【谷絲謨】「日、月、星辰、山、龍、華蟲作繪。」鄭注曰、「繪

讀曰績。」讀曰猶讀爲、易其字也。以爲訓畫之字當作績也。繪訓五采之繡。故必易繪爲績。

鄭司農注『周禮』引『論語』「績事後素」。

四字(※「一曰畫也」の四字を指す。)は『韵會』に依りて補ふ。今、傳はるところの小徐繫傳本は、此の卷、全て闕く。黃氏、『韵會』を作りし時に見るところ、尙ほ完し。小徐本に此の四字有るを知るなり。

「畫」は、「介」なり。今、これを「畝畫」と謂ふ。

「績」、「畫」は、雙聲なり。

【考工記】に曰く、「設色の工は、畫、績、鐘、篋、帆。」

又た曰く、「畫績の事は、五采を襍あはす。」

【谷絲謨】に「日、月、星辰、山、龍、華蟲もて繪を作れ。」とあり。鄭注に曰く、「繪は讀みて績と曰ふ。」と。「讀みて曰ふ」は、猶ほ「讀みて爲す」のごとくして、其の字を易へるなり。以爲く、「畫」を訓ずるの字、當に「績」に作るべきなり。「繪」は「五采の繡」と訓ず。故に必ず「繪」を易へて「績」と爲す。

鄭司農『周禮』に注して『論語』の「績の事、素を後にす」を引く<sup>⑩</sup>。

こまでの議論の中心になってきた「畫」、「績」、「繡」、「繪」



の四字の関係を整理しておく。

『説文解字』に「畫、介也。」

「績、一日畫也。」……………①

「繪、五采繡也。」……………②

「繡、五采備也。」……………③

『古文尙書』鄭注に「繪讀曰績。」……………④

『周禮』に「畫績之事、襍五采。」……………⑤とある。

①から 「績」＝「畫」……………i

②から 「繪」＝「繡」……………ii

④から 「繪」＝「績」……………iii

iii、iから 「繪」＝「績」＝「畫」……………A

iiから 「繪」＝「繡」……………B

よって、「繪」＝「績」＝「畫」 A

「繡」  
B =

縦のAの線と横のBの線とが係聯して、「畫」＝「繡」となる。

『説文解字』許敍「段注」についての一考察(田村(大田))

②から「繪」↓「五采」

③から「繡」↓「五采」

⑤から「畫績」↓「五采」

よって、「畫」「績」「繪」「繡」の四字とも「五采」という属性を持つことが明らかになった。換言すると、これら四字は、「五采」という内包を持つ同じ外延の集合の要素ということになる。

訓詁を縦横に駆使し、「五采」という語を中心にして、四字すべてが繋がった。

ここで注目すべきは、「績」字の注のまとめとして【段注④】

「此皆證繪繡無二事也。」(此れ皆な「繪」、「繡」に二事無きを證にするなり。)と言っている点である。段玉裁は許慎の説解に注を施しているように装いながら、「繪」と「繡」とが古はひとつの範疇のものと認識されていたことを証明している。そして、古は「繪」(絵画)と「繡」(刺繡)とを同じ範疇でとらえていた証左として、段玉裁は、『尙書』と『論語』を例示した。【段注①】では、古は「繪」と「繡」とをひとつにまとめて色を施す手工とみなし、分けて考えていなかったことを述べている。古訓では「績＝畫」、「繪＝繡」と置き換えていることから、「繪」と「繡」とが二事に分かれていなかった証左としている。【段注②】では『尙書』の用例を、【段注③】では『論語』の用例を挙げ、「繪」と「繡」とが一つ事であることを例証している。

この「繪」字の段注と先に見た「繡」字の段注とを合わせる  
と、段玉裁は、「繪」と「繡」とを一事とみなし、さらに「畫  
繪」と「文(字)」とも一事とみなしていることから、結果とし  
て、絵画、刺繡、文字をひとつの範疇でとらえようとしているこ  
とになる。これは、段玉裁自身が文字というものの位置づけを、  
「絵画」U「刺繡」U「文字」として、文字を絵画に包括させたかっ  
たとも考えられるが、前述したように、「許敍」における重要な  
箇所では許慎が「畫繪」から「文」へと飛躍したことを合理的に説  
明しようとした苦肉の論理立てだったとも考えられる。

段玉裁が「繡」字と「繪」字の説解に対する注で引くところの  
『古文尙書』「虞書」の「咎繇謨」の引用箇所は、

「帝曰」……予欲觀古人之象。日、月、星辰、山、龍、華  
蟲、作會。宗彝、藻、火、粉米、黼、黻、絺繡、以五采彰施  
于五色作服。汝明。

「帝、曰く、」……予は古人の象を觀しよさんと欲す。日、月、  
星辰、山、龍、華蟲は會に作し、宗彝、藻、火、粉米、黼、  
黻は絺繡とし、五采を以て彰かに五色に施し服を作れ。汝、  
明らかにせよ。(※訓読はカールグレンの解釈する鄭玄の説  
による。)

である。孔安國の傳では、經文の「予欲觀古人之象。」を「欲觀  
示法象之服制。」(象に法るの服制を觀示せんと欲す。)と解し、  
禹王が股肱の臣の益と稷に、天文自然等の象徴を法とした服装の  
制度を示したいと意思表明し、その考え方を述べたものだとし、  
形象を施す対象は衣服と旌旗としている。孔安國の傳で注目すべ  
きは、「火、爲火字。」(火は、火字を爲す。)と「黻、爲兩己相  
背。」(黻は、兩己に相ひ背くと爲す。)の二箇所である。

刺繡も糸を用いた絵画であり、文様に彩色を施す点でも絵画と  
同じ手工であるから一事とみなすことと、刺繡を含めた「畫繪」  
と「文字」とを、一事とみなすこととの間には論理的な飛躍があ  
る。それを説明する手がかりは、天子の冕服の十二章の図案のう  
ちの「火」と「黻」とにある。「火」については、火の字を為  
す、「黻」については、二つの己という字を背中合わせに線対称  
にするというところから、針と糸を用いた刺繡という手段で、文  
字を図案として画えがくことがわかる。ここまでくれば、刺繡と文字  
との違いは、何に、何で、文字を表すか、の違いだけである。む  
しろ、絵画と刺繡を同一範疇にしたことで、文字も絵画と刺繡  
の範疇へと引き寄せられる。もともと秦の八書には「蟲書」な  
ど、きわめて裝飾的な書体があったことを考えると、絵画と刺繡  
と文字との境界線はますます曖昧模糊としてくる。

## 小結

本稿では、段玉裁が「許敍」の「初造書契、依類象形。故謂之文。」の「文」字に「文者遣畫也。」と注したとき、何をどのよう  
に説明しようとしたのかをたどってみた。鍵となったのは、許慎  
の説解の「錯」字を「遣」字に改めた根拠と「文」字をめぐる考  
察の道程である。「交錯」と「交遣」、「文章」と「彰彰」との本  
義の違いを通して「文」の本質を明らかにしようとする過程に  
は、三つの特徴があった。「仮借」の概念、形声文字と呼ばれる  
文字の構造における「偏」と「旁」、すなわち「部首(義符)」と  
「音符」との関係性と、「双声」、「疊韻」の原理と通ずる「声訓」  
に見られる音と義の関係性への目配りである。この三つの特徴に  
は、いずれも、文字の意味を追究するにあたっての、段玉裁の方法  
論が実践的に現れているといえる。と同時に、『説文』の中のい  
かなる文字に注する場合にも、必ず『説文』のあらゆる説解を縦  
横に結びつけ、整合性を求めようとする、という姿勢も如実に現  
れていた。だからこそ、ひとたび「段注」を紐解くと、『説文』  
の大海をあちこち彷徨う体験を強いられるのである。

本稿を終えるにあたって、よく知られた『周易』「繫辭傳下」  
の一節を引いておく。

子曰、「書不盡言、

『説文解字』「許敍」段注についての一考察(田村(大田))

言不盡意、

然則聖人之意、不可見乎。」

子、曰く、「書は言を盡さず、

言は意を盡さず、

然らば則ち聖人の意、見るべからざるか。」

「書」とは書記言語、すなわち「文字」である。「言」とは音声言  
語、すなわち「音声(発音)」である。「意」とは「意味」、「毛  
詩」の「大序」の言葉で言えば「志」、すなわち「心の内にある  
思い」である。この孔子の言葉は、文字として記録されたもの  
は、音声として話された言葉を完全には網羅できない。その音声  
として表出された言葉でさえ、心の内なる思いを完全には言い尽  
くせない。つまり、「思い」√「音声言語」√「書記言語」と漸次的  
に目減りしていく。しかし、古の聖人の思いに到達するには不完  
全な文字を手がかりにするよりほかはない。孔子の言葉は、一体  
それで聖人の思いに到達できるのか、という絶望、あるいは文字  
に対する一種の懐疑、として読むことができる。と同時に、それ  
でも文字によって記録されている限りは、その文字の字義を一字  
一字明らかなることによって少しでも聖人の思いに近づけるはず  
だ、という希望、あるいは古人の思いに寄り添うべく勉学に励む  
しかないという決意、として読むこともできる。それが、古から

文字の学が重視される所以であり、そしてまた、「文字Ⅱ形」と「思いⅡ義」とを媒介する要素として「発音Ⅱ音」が重要な位置を占める所以でもある。

次節では、「文」と「苾」との本義の違いについて、段玉裁はなぜ、『説文』の説解、「文、遣畫也」への注釈という形を借りて言及したのかについて考察する。(続)

## 注

- (1) 「賓既酌主人」の「酌」字は、一九九八年中華書局影印「漢魏古注十三經」(中華書局一九三六年版「四部備要」丙種本を縮印したもの)所収の「毛詩」(以下「四部備要本」と称す)では「酢」字に作っている。四部備要本は、上海中華書局が相臺岳氏家塾本に拠って校刊したものである。ちなみに、『四部備要』丙種本を縮印した『唐宋注疏十三經』所収の『毛詩注疏』は、上海中華書局が阮氏刻本に拠って校刊したもので十三經注疏本と同じく「酌」に作っている。しかし、すぐ下文の「鄭箋」で、「賓に酌すを「釀」と曰ふ。」と言っていることから、賓客が返礼として主人に献杯する場合は「酌」ではなく「酢」とすべきだろう。その証左として、『毛詩』「大雅」「行葦」の「或獻或酢一句の「鄭箋」に、「進酒於客曰獻、客答之曰酢。」(酒を客に進むは「獻」と曰ひ、客これに答ふは「酢」と曰ふ。)とあることから、「酌」字は「酢」字に作るべきだと考える。
- (2) 段玉裁は、『玉篇』、『廣韻』いずれにも校と敎とは同じとあることから、今本説文で「校」と「敎」が分岐した理由は不明、「交灼」という語も意味不通、と言っている。或いは「交木灼也」の誤りだろうか。
- (3) 段注に、「枝」は「支」に作るべきであり、『集韻』、『類篇』に依って正

すとある。また、「竹」部に「籩、漉米數也」(籩は、米を漉く數なり)、「簣、炊奠也」(簣は、炊奠なり)とあり、「籩」と「簣」とは同一物で、米を漉いで炊く前に漉いだ米を漉いで水を切る物。三本の交差させた木で炊奠を支えるのは、水切れをよくするためであり、この三交させた木を「楛」と言う、とある。

- (4) この説解は「説文」「衣」部「衿」字ではなく「衿」字の説解である。「衿、交衽也」とある。段注に詳しい。

(5) 「鄭箋」はさらに、「桑扈、竊脂也。興者、竊脂飛而往來有文章、人觀視而愛之。喻君臣以禮法威儀升降於朝廷、則天下亦觀視而仰樂之。」(桑扈は竊脂なり。興なるものは、竊脂、飛びて往來するに文章有れば、人、觀視してこれを愛づ。君臣、禮法威儀を以て朝廷に升降すれば、則ち天下も亦た觀視してこれを仰ぎ樂しむを喻ふ。)と言ふ。

「秦風」「黃鳥」の「交交黃鳥、止于棘」句の「毛傳」に、「交交、小貌。黃鳥以時往來得其所。人以壽命終亦得其所。」(交交は、小さき貌なり。黃鳥は時を以て往來し其の所を得。人、壽命を以て終るも亦た其の所を得。)とあり、「鄭箋」に、「黃鳥止于棘以求安己也。此棘若不安則移。興者、喻臣之事君亦然。」(黃鳥、棘に止まり以て己を安んずるを求むるなり。此の棘、若し安からざれば則ち移る。興なるものは、臣の君に事ふるも亦た然るを喻ふ。)とある。

「小雅」「小苑」の「交交桑扈、率場啄粟」句の「毛傳」に、「交交、小貌。桑扈、竊脂也。言上爲亂政而求下之治、終不可得也。」(交交は、小さき貌なり。桑扈は、竊脂なり。言ふところは、上は亂政を爲して下の治まるを求む、終に得べからざるなり。)とあり、「鄭箋」には、「竊脂、肉食。今無肉而循場啄粟、失其天性、不能以自活。」(竊脂は、肉食なり。今、肉無くして場を循りて粟を啄むは、其の天性を失ひ、以て自ら活くる能はず。)とある。

- (6) 「交交」が鳥を形容しているにも関わらず、「桑扈」の「鄭箋」と「黃鳥」、「小苑」の「毛傳」とで「交交」の解釈が異なる理由を、段玉裁は「方語」、すなわち方言の違いに求めている。しかし、「黃鳥」では、「毛

傳」で「小さき貌」と言っているが、同時に、「時を以て往來す」とも言い、「交は飛び往來する貌」という「桑扈」の訓話と相通じている。「小苑」でも「鄭箋」は「循場」と言い、「循」字に往來する意が反映されているようにも読める。『毛詩』において同じ字句に異なる訓話をあてることはままあり、この場合も、詩全体の主旨が異なるため、一方は、鳥があちこち飛んで往來する様子を言うと言解き、他方は、棘の上に止まることができるほどの小さな鳥が安住できる棘を探して右往左往する様、小さな鳥でありながら肉食で肉が無いため人間の食べる穀物をあちこち食い荒らし民に被害をもたらしている様子と言解けば、必ずしも方言差とする必要はないのではないだろうか。

(7) もしも、秦篆の「畫」と、その形に基づく説解に忠実であろうとするならば、楷書の字形は「畫」とするのが本義に最も近いだろう。

部首の「聿」については説解で、「聿、所曰書也。楚謂之聿、吳謂之不聿、燕謂之弗。从聿一。」(「聿」は、書く所曰なり。楚はこれを聿と謂ひ、吳はこれを不聿と謂ひ、燕はこれを弗と謂ふ。聿と一に从ふ。)と言っている。

(8) 『古文尙書馬鄭注』(馬氏鄭氏注、王應麟撰集、孫星衍補集『尙書讀本』)では、「績」を「會」に、「希」を「絺」に作っている。鄭注は「會、讀爲繪。」となっている。

(9) 「繪」は、段玉裁の引く鄭注『古文尙書』では「績」に作る。阮元校勘の十三經注疏本では「會」に作る。

(10) 所謂十三經注疏本『周禮』「考工記」「畫績」の、先に引用した箇所の少し後に、「凡畫績之事、後素効。」(凡そ畫績の事、素効を後にす。)とあり、鄭玄の注に、「素、白采也。後布之、爲其易漬汗也。不言績、繡以絲也。鄭司農說以論語曰「績事後素。」(「素」は、白き采なり。「後」にこれを布くは、其の汗に漬り易き爲なり。「繡」と言わざるは、「繡」は絲を以てすればなり。鄭司農、説くに『論語』を以てす。曰く、「績」の事は素を後にす。)とある。

『尙書』鄭注引くところの鄭司農注の『論語』では「績事後素」と

『說文解字』許敍段注についての一考察(田村(大田))

なっているが、中華書局『漢魏古注十三經』所収の『論語』「八佾」では「繪事後素」と「績」字を「繪」字に作っている。何晏の集解は鄭玄の注を引いて言う。「繪、畫文也。凡繪畫(梁・皇侃『論語義疏』(以下「皇本」と略称)では「畫繪」に作る)、先布衆色(皇本では「采」に作る)。然後以素分布其間(皇本では「布」字が無い)、以成其文。喻美女雖有倩盼美質、亦須禮以成之(皇本では「之」字が無く「也」とする)。「繪」は、文を畫くなり。凡そ繪畫は、先づ衆色を布く。然後後に素を以て其の間に分布し、以て其の文を成す。美女に倩盼美質有ると雖も、亦た禮を須み以てこれを成すを喻ふ。)と。以上のことから、「績」と「繪」とは交換可能だったことが推測される。

## 参考文献

(单著)

頼惟勤 監修・說文會 編『說文入門——段玉裁の「說文解字注」を読むために』大修館書店、一九八三年

阿辻哲次『漢字学——『說文解字』の世界——』東海大学出版会、一九八五年(新装版 二〇一三年)

近藤光男『清朝考證學の研究』研文出版、一九八七年(論文)

田村(大田)加代子『說文解字』許敍の「庶業其斲」句について——「其」字の解釈をめぐって——『名古屋大学文学部研究論集』文学六十

一、一二七頁〜一四八頁(二頁〜二二頁)名古屋大学文学部、二〇一五年三月

(訳註)

岡村繁『說文解字叙』段注箋釈(二)(久留米大学)比較文化研究所紀要 第二輯、一頁〜八三頁所収、久留米大学比較文化研究所、一九八七年

岡村繁「説文解字叙」段注箋釈(二)、『久留米大学』比較文化研究所紀要』第三輯、六七頁〜九七頁所収、久留米大学比較文化研究所、一九八八年

岡村繁「説文解字叙」段注箋釈(三)、『久留米大学』比較文化研究所紀要』第五輯、七七頁〜一三三頁所収、久留米大学比較文化研究所、一九八九年

田村(大田)加代子「説文解字」『許絃段注』訳注の試み(一)、『饜饕』第十二号、三頁〜三十頁、中国人文学会、二〇一四年九月

田村(大田)加代子「説文解字」『許絃段注』訳注の試み(二)、『饜饕』第二十三号、三頁〜一六頁、中国人文学会、二〇一五年九月

キーワード…説文解字、段玉裁、文、錯畫、仮借、引申

**Abstract**

Duan Yucai (段玉裁)'s Notes on the Preface of *Shuowen-Jiezi* (説文解字) written by Xu Shen (許慎):  
A thought about Duan Yucai's connotation of the note: "Wen (文) is crossed-lines (錯畫)."

Kayoko (Ota) TAMURA

The goal of this article is to explain what makes Duan Yucai (段玉裁) interpret "wen (文)" in Xu Shen (許慎)'s Preface of *Shuowen-Jiezi* (説文解字) as "wen (文) is crossed-lines (錯畫)", and makes him criticize that "cuo (錯) should be written as cuo (道)".

I follow Duan Yucai's way to see how he reaches his conclusion by way of analyzing his notes on Xu Shen's interpretation of the Chinese Character "wen (文)". At the same time, I utilize several Chinese Characters such as "hua (畫), hui (纘), hua (繪), xiu (繡) and wucai (五采)" and the interpretation about these words made by Duan Yucai. At the end, I found out the hidden reason and the true motivation of Duan Yucai behind the notes on "wen (文)".

Duan Yucai's interpretation coincides with the phrase of the most important part of Xu Shen's Preface: "書曰予欲觀古人之象。言必遵脩舊文而不穿鑿。". The thesis follows the quotation. This is a common pattern of the Classic Chinese rhetoric. Duan Yucai's intention of several notes is to search a logical relation with the quotation: "書曰予欲觀古人之象" and the thesis: "必遵脩舊文而不穿鑿".

Keywords: *Shuowen-Jiezi*, Duan Yucai, wen, cuohua, extenuation, derivative